

スポーツにおける運動有能感への原因帰属の影響と技術指導による変化

The Influence of the Attribution of Causality on Exercise Able Feeling and Change by the Technical Guidance in Sports

小宮 純樹^{*1}, 山口 真之介^{*1}, 近藤 秀樹^{*1}, 大西 淑雅^{*1}, 西野 和典^{*1}

Junki KOMIYA^{*1}, Shinnosuke YAMAGUCHI^{*1}, Hideki KONDO^{*1}, Yoshimasa OHNISHI^{*1}, Kazunori NISHINO^{*1},

^{*1}九州工業大学

^{*1}Kyushu Institute of Technology

Email: o232031j@mail.kyutech.jp

あらまし：高校の部活動（ハンドボール部）部員に対して、運動有能感と試合に対しての原因帰属についてアンケートを用いて調査した。調査結果から、原因帰属の際、能力や努力、相手チームに帰属することで運動有能感に負の影響を及ぼすと考えられる。また判断力を意識した指導により運動有能感が向上すると考えられる。

キーワード：部活動，運動有能感，原因帰属，状況判断

1. はじめに

近年、生徒の主体的な行動・態度を向上させる活動が注目されている。

人が主体的に行動を起こす際の重要な要素の1つとして自己効力感がある。これはある事象に対して、自分がどのくらい上手くできるか感じる自信のことである。この自己効力感は、学習目標の設定や学習過程に影響を及ぼすと考えられる。

運動時の自己効力感を運動有能感という。また事象の結果に対しての原因を認知することを原因帰属という。原因帰属の点からスポーツの競技力向上を目的とした場合、試合の結果に対しての原因認知は重要である。

本研究では、スポーツを行う際の重要要素と考える運動有能感に関して、原因帰属の影響を調査する。さらに技術指導による運動有能感の変化を調査する。

2. 評価方法

2.1 運動有能感の評価

運動有能感は、藤田他⁽¹⁾により課題基準有能感（ある課題に対する有能感）、過去基準有能感（過去の自分と比較した場合の有能感）、他者基準有能感（他人と比較した場合の有能感）の3つに分類される。各基準有能感に3つの質問項目を、計9つの質問項目を用いて5件法で評価する。得点が高いほど有能感は高い（課題基準有能感の質問の一例；どんなに難しいプレーでも練習をすればできると思う）。

2.2 原因帰属の評価

原因帰属は、結果の要因を「能力・努力・自チーム・相手チーム・指導者・運・体調」の7項目とする。試合後に生徒に「成功」と「失敗」を判別してもらう。「成功」または「失敗」に沿うように、原因帰属の要因の質問項目を用いて5件法で評価する。得点が高いほど要因への帰属が強い。（「失敗」と判断した際の能力要因の質問；運動能力が低いから）。

3. 調査

対象はA高等学校のハンドボール部部員29名である。

はじめに8月4日に1回目の運動有能感のアンケート調査を実施した。8月7日から9日にかけて試合を複数回行い、試合後に原因帰属のアンケート調査を実施した。10月3日に2回目の運動有能感のアンケート調査を実施した。その後、約1ヶ月の間に計12回の指導を行った。11月1日に3回目の運動有能感のアンケート調査を実施した。有効回答は28名であった。

4. 結果と考察

3回行った運動有能感のアンケート結果を図1に示す。

平均得点の変化としては課題基準有能感が第1回から第2回にかけて下がり、他者基準有能感が第2回から第3回にかけて上がっている。それ以外に大きな変化は見受けられない。

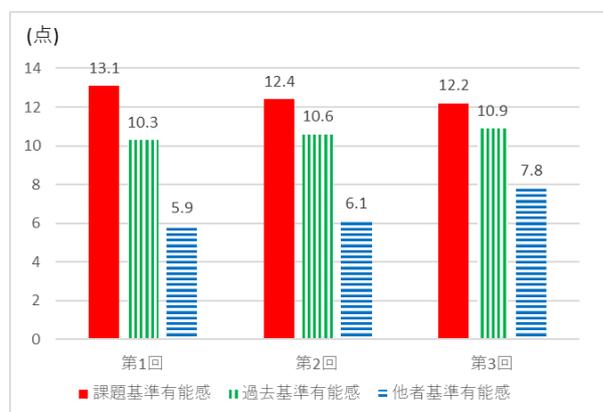


図1：運動有能感のアンケート結果

4.1 原因帰属の影響性

試合後に「失敗」と判断した際の原因帰属の要因と第1回運動有能感との相関を図2に、後日行った第2回運動有能感との相関を図3に示す。「成功」に関しては、一度も「成功」と判断しない生徒が半数近くおり全生徒の回答が得られていないため省く。試合の内容に納得できない生徒が多いことが伺える。

図2より、能力要因は課題基準有能感と他者基準有能感に負の相関であることがわかる。自身の運動能力が低いと判断する生徒ほど、課題達成は難しく、他者よりも劣っていると感じていた。指導者要因と他者基準有能感が正の相関であることがわかる。他者よりも上手くなるためへの指導に対して改善を求めているのではないかと考えられる。

図3と図2を比較すると能力要因が課題基準有能感との相関が消え、過去基準有能感と負の相関が表れた。能力要因に帰属することは、課題基準有能感に影響がないと考えられる。しかし、能力要因への帰属が強い生徒ほど、過去基準有能感が低く自身の向上が以前と比べて見受けられないと感じやすく、自身に対しての評価が厳しいと考えられる。能力要因に帰属することは、過去基準有能感を下げる影響があると考えられる。

さらに、過去基準有能感は体調要因と正の相関が表れた。体調が悪かった生徒は、自身の現在の状態が以前に比べて良く、プレーに良い方向に反映されているのではないかと考えられる。

他者基準有能感は、努力要因と相手チーム要因と負の相関が表れた。球技は努力要因に最も帰属しやすいが、帰属が強すぎるのは、他者と比較した場合により劣っていると感じやすいと考えられる。帰属がやや強い程度が他者基準有能感には良い影響を与えると考えられる。さらに、相手チームは他者の部分にあたるため、相手チーム要因への帰属が強いほど他者より劣っていると感じる。相手チームに影響

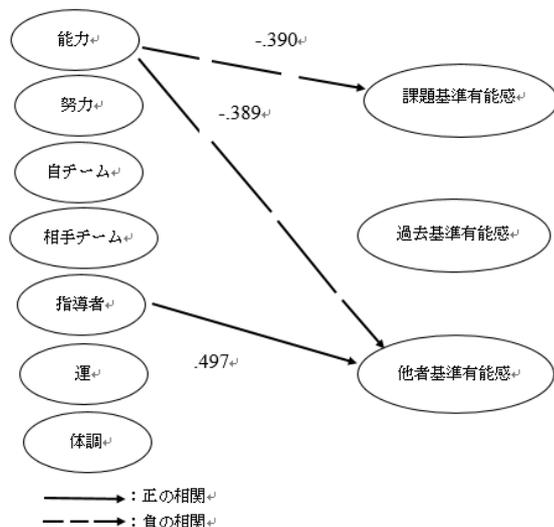


図2 原因帰属（失敗）と第1回運動有能感との相関図

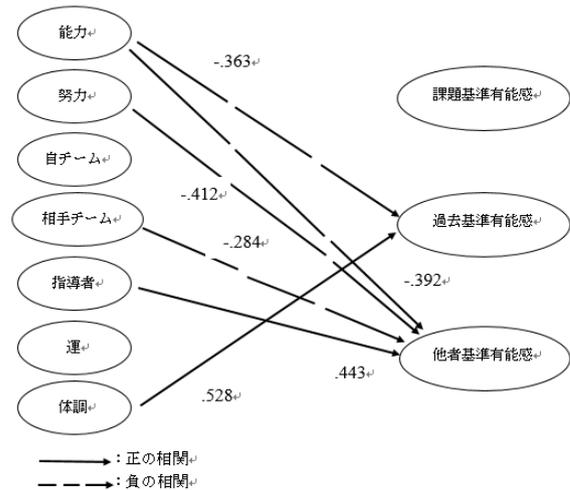


図3 原因帰属（失敗）と第2回運動有能感との相関図

されないように、自身のプレーだけに集中するような指導が重要と考えられる。

4.2 指導による変化

表1に運動有能感の総合得点を4段階評価したときの人数を示す。Aが高得点のグループである。

表1 運動有能感の評価表

評価	A	B	C	D
第1回	3人	14人	10人	1人
第2回	1人	16人	10人	1人
第3回	7人	12人	9人	0人

表1より指導後の第3回の運動有能感が向上していることが分かる。特に図1より他者基準有能感が向上したことが分かる。常に周りの状況から自身に何ができるか。制約はつけず、相手の能力ではなく状態を常に考えることを意識させる生徒の判断力を意識した指導を行い、上記のような結果に至った。判断力向上を目的とした指導は運動有能感向上につながると考えられる。

5. おわりに

運動有能感に対して、原因帰属の影響と技術指導による変化を調査した。自身の能力や他者に帰属することは運動有能感を下げる影響があると考えられる。能力や他者に影響されない、常に自身のプレーを意識させる指導が運動有能感向上には重要と考えられる。

参考文献

- (1) 藤田勉, 西種子田弘芳, 長岡良治, 飯干明, 前田雅人, 高岡治, 森口哲史, 佐藤義人: “大学生を対象とした運動有能感下位尺度の検討”, 鹿児島大学教育学部研究紀要, 人文・社会科学編, 第61巻, pp.73-81 (2010)